

河野哲也 著

『現象学的身体論と特別支援教育：  
インクルーシブ社会の哲学的探究  
(心の科学のための哲学入門)』

北大路書房 2015年3月 四六判 238頁 ¥2484(税込)

藤原 敬

本書は、「運動障害を支援する教育とリハビリテーションを検討し『直す』必要がある」(p.5)という問題意識のもと、「身体とは何かを見直し、その考え方を障害のある人たちのための教育とリハビリテーション、福祉に活かす」(p.1)ために書かれた。従来の発達障害のリハビリテーションや教育法においては、「障害は治療するもの」という「治療モデル」(あるいは「医療モデル」)の障害観が根強く存在した。しかし、当事者の経験に即して考えれば、「治療モデル」によるリハビリテーションのとらえ方は不適切なのではないか。なぜなら、脳性まひや発達障害の問題は、障害を取り除くことによって問題を解決するという類の「治療」によっては解決できないからである。そうではなく、環境と主体の相互作用のなかで生起している問題を解きほぐすことによって、発達障害のリハビリテーションや教育法の問題の実質的な解決策を探っていかなければならないのではないか。本書における主張の核心は、この点にある(はじめに)。

本書は、理論編と実践編からなる。まずは、理論編からみていこう。理論編では、第一章「現象学的身体論」、第二章「発達とは何か」、第三章「表現としての身体から当事者の参加へ」について論じられている。ここでは、本書における現象学の位置づけに着目しつつ、「生態学的現象学(生態現象学)」の立場を紹介する。本書で展開される現象学は、フッサールやメルロ＝ポンティらが発展させた現象学の臨床実践への応用である。現象学は、「私たちが経験しているままだに世界を記述し、世界のさまざまな対象がどのような意味を担っているかを主体の立場から理解する立場」(p.27)として定義されている。当事者の経験を、当事者の経験に即して記述することが目的とされて

いるのである。また、本書において、現象学は、ジェームズ・ギブソンの「アフォーダンス」や、アマルティア・センとマーサ・ヌスバウムの「ケイパビリティ」の概念と結びつけられ、「生態学的現象学」として打ち出される。「アフォーダンス」とは、「動物の行動や生態と対をなしている環境の側の生態学的特性」(p.40)のことを、「ケイパビリティ」とは、「ある人にとって選択可能な『機能(functioning)』の総体」(p.49)のことをさす。「アフォーダンス」と「ケイパビリティ」は、どちらも、主体にとっての「～ができる」という意味に着目している。この二つの概念の含意する考え方を統合したのが、「生態学的な視点と、本人の経験に基づく現象学的なものの見方」(p.18)を組み合わせた「生態学的現象学」の立場である。

実践編では、「生態学的現象学」の立場にもとづいて、第四章「脳性まひの現象学」と第五章「自閉症の現象学」が展開される。第四章で展開される熊谷晋一郎や稲原美苗の現象学的な記述では、社会の「標準」による画一化の問題が浮き彫りにされる。本書のなかで「試合のない永遠の素振りのようなリハビリ」(p.136)という言葉で表されているように、健常者の運動を「標準」にしたリハビリは、本人にとって意味をなさないという問題があるのである。第五章で展開される綾屋紗月や東田直樹の現象学的な記述では、従来のコミュニケーション観が批判的にとらえなおされる。すなわち、健常な人間には相手の内面を認知する能力が備わっていて、それが社会生活の基盤となっているという想定が批判され、コミュニケーションは、相互の理解を深め合う循環的で創発的な営みとしてとらえなおされる(p.167)。最後に、第六章「インクルージョンと当事者研究」では、現象学的な視点から経験を記述する当事者研究の意義として、クオリティー・オブ・ライフの向上に寄与することがあげられる。

現在、日本でも、様々な教育の現象学が展開されているが、本書は、アクトアルな社会問題に寄与する最も地に足の着いた教育の現象学として、私たちに「教育をどうするべきか」についての問題提起を投げかけている。